長岡市長記者会見要旨

日　時：令和６年１２月２３日（月）午前１０時３０分から
会　場：アオーレ長岡東棟４階 大会議室

【会見項目１：長岡の魅力が光る返礼品が続々登場！
ふるさと納税寄付額が早くも昨年度実績を突破 】

（市長）

令和６年度の長岡市へのふるさと応援寄付金（ふるさと納税）が、過去最高であった昨年度の 31 億円を上回り、12 月 17 日現在で 34 億 9 千万円となりました。寄付件数は 11 万 4 千件です。

返礼品としてはお米が多く選ばれています。長岡産コシヒカリは非常に人気が高く、定期便が好評となっています。

現在 170 以上の事業者から 950 件の返礼品を提供いただいています。市と事業者はともにアイデアを出し合いながら、より魅力的な返礼品となるよう取り組んでいます。

ふるさと納税ポータルサイト「ふるさとチョイス」を通じ、年間 1,000 件以上の応援メッセージが届いています。いただいた応援メッセージは、市政だよりで紹介するほか、「ふるさと納税ニュース」として、寄付金の使い道や注目の返礼品などの情報と合わせて、アオーレ長岡大型ビジョン、まちかどフェニックスビジョンで放映し、市民の皆さまに紹介しています。

資料の裏面では、長岡市の魅力が詰まった返礼品を紹介しています。

大口れんこん、栃尾のあぶらげ、長岡の歴史を振り返る写真集など、バラエティに富んだ返礼品を取り扱っています。本日会場にポータルブル電源を持ってきていますが、こちらも多くの皆さんから選んでいただいています。

明日から市政だよりの年間購読や、1 月からデジタル通貨「ながおかペイ」を返礼品に加えます。

今後、ＥＣサイトなどの顧客データとふるさと納税の情報を連携させ、これからのふるさと納税制度を発展させたいと考えています。そして、お客さまが、長岡に来てどういったものを求めるのか、観光の面、インバウンドの面など、交流人口の拡大にこの情報を活かしていきたいと考えています。

（記者）

長岡市への納税額が顕著に増えている要因について、市長として受け止めをお願いします。

（市長）

市長になった８年前は、納税額は１億５千万円か、２億円弱だったと記憶しています。

当時の長岡市は、政策に共感した方に寄付いただくという、本来のふるさと納税の趣旨に沿った展開をしていました。しかし、長岡をＰＲし、知ってもらう、そして繋がりを持ってもらい、最終的に来てもらうという大きな目標を考えた時に、長岡の産品を皆さんに味わってもらう、あるいは使ってもらうことが、ふるさと納税の制度を活用する道だと考えました。そして、さまざまな長岡の産品を、業界の皆さんの協力をいただきながら増やしてきました。その成果が出ていると思っています。

また、返礼品としてお米が伸びていることは、米価の高騰、物価の高騰があり、そういった中で、ふるさと納税を有効に使いたいという国民の皆さまの動きもあるのではないかと思っています。

【会見項目２：雪国の太陽光発電の普及に向けて
フレキシブル太陽光パネルの性能評価を開始 】

（市長）

長岡市は、令和５年度から雪国対応の太陽光発電設備の普及を目指し、実証実験を行っています。

今年度は、「軽量」「薄型」「柔軟」といった特徴を持つフレキシブルパネルを用いた実証実験を県内で初めて実施いたします。

今後期待される、この新しいタイプの太陽電池が市場化した際は、本事業による実績が活かせると考えています。

実施場所および発電容量については、資料の通りです。宮内地区の三つの市有施設において、総発電容量約 48 キロワットのパネルを設置いたします。これは、この三つの市有施設の電気使用量の約 10％を賄う発電量となる見込みです。

この三つの市有施設には、それぞれモニターを設置し、来館者の皆さまに発電量をお見せしたいと考えています。

今回は資料に記載した市内３事業者の協力を得て進めていきます。

フレキシブルパネルの特徴について、重量は従来のガラスパネルと比べ４分の１程度で、厚みは 2.5 ミリです。湾曲することが可能で、かまぼこ型の体育館の屋根や建物の曲面に、設置することが可能です。接着工法のため、壁に穴を空けて本体を固定する必要がなく架台も不要で、施工費の圧縮が見込まれます。

従来のパネルは、屋根や屋上に設置するため、積雪によるパネルの破損、落雪による被害の心配がありましたが、今回のパネルは壁面設置が可能ですので、積雪荷重による問題を回避することができます。

今後は、太陽光発電事業への新規参入、事業拡大を目指す市内業者のコミュニティを形成し、知識、技術の習得、施工できる業者を増やしていきます。そして、長岡における太陽光発電の社会実装を進めていきたいと考えています。

今回のフレキシブルパネルは、アオーレ長岡１階総合窓口にて、これまでの実証実験の紹介と合わせて展示しております。

（記者）

昨年からの取り組みを踏まえ、長岡での太陽光パネルの有用性、可能性について、どのように受け止めています。

（市長）

先日、国内の大手企業２社が、この種のパネルの市販に向けて取り組んでいるという報道がありました。

社会実装、普及までは少し時間が必要だと思いますが、こういったものに置き換わっていくと思っています。

先駆けて実証実験することによって、時代を先取りしていきたいと考えています。

積雪荷重が問題となる雪国の家屋や建物に、太陽光パネルを設置することは、「非常に難しい」や、「上に雪が積もると発電できないのではないか」などの問題がありました。

しかし、今回のパネルは壁面への設置や、落雪型の屋根材とうまく組み合わせると、非常によく雪が滑るため、屋根そのものに設置することが可能ではないかと思っています。

雪国向けの非常に良い太陽光パネルになる可能性があるので、普及に頑張っていきたいと考えています。

この度の雪国実証実験を進めるうえで、マスコットも活用して進めていきたいと考えております。

（環境部長）

太陽光パネルにちなんだマスコットが登場する、再エネ普及啓発動画を作成しています。マスコットの名前については、これから子どもたちの公募などで決めようと考えています。

マスコットのモチーフになっている動物はアルマジロで、背中の硬い皮膚の部分が太陽光パネルになっています。

こんな風に、自動車も外装にパネルを使用すれば、将来的に車自体で発電することも可能なのではないかと期待しています。

（記者）

１月から性能評価を開始ということですが、いつ設置は完了したのでしょうか。また、降雪期に発電できるか確かめるため、１月から開始なのでしょうか。

（環境部長）

パネル等の機器の設置は完了していますが、発電した電力を施設で消費するための東北電力との系統連系の手続きに１カ月程度かかるため、１月末くらいの予定でスケジュールを組んでいます。

（記者）
評価はいつまで行うのでしょうか。
（環境部長）
発電量等のデータを収集・分析しながら、雪国での有効性が確認できるまで実施したいと考えております。
（記者）
結果を事業者に共有するなど、ある程度の結論を出すタイミングの想定はありますか。
（環境政策課長）
去年と今年のデータを市のホームページ内の「ながおか省エネ・再エネポータルサイト」に掲載し、周知しようと思っています。
今後の効果、内容によって普及すべきという判断になれば、施工方法や、設置におけるノウハウなどを共有したいと思っています。事業者が生業として事業を広く展開していけるようサポートしていきたいと考えています。
（記者）
この実証実験について、今後の展開を教えてください。
（市長）
実用性が高いという判断になれば、市民の皆さんに設置を促したいと思います。
この新しいパネルについては、長岡の業者が県内での普及を図っていけるポテンシャルを持つよう促していきたいと思っています。
（記者）
こういった選択肢が一つ増えることについて、期待感を教えてください。
（市長）
今後の電力を賄う大きな要素が、再生可能エネルギーである太陽光パネルと言われる中で、雪国であることにより十分に活用できないことは悔しい話です。
ぜひこういった新しい技術によって、壁を突破し、雪国でも太陽光発電が十分に活用できる状況を作っていきたいと思っています。
（記者）
これまでの実証実験についても、引き続きモニタリング調査を行う予定でしょうか。
（環境部長）
はい、今後も引き続き行う予定です。
５年度から参画している事業者の皆さまと定期的に意見交換をしながら検証を行っています。
（市長）
従来型パネルの設置件数は、雪国では非常に少なく、そもそも事業者の皆さんが施工技術を持っていません。
冬の積雪期を除いても９割近くの発電効率があることを皆さんに知っていただき、ぜひ

従来型のパネルも積極的に設置していただきたいと思います。
　まずは従来型パネルの技術を市内事業者に取得してもらい、新しいパネルについては、先行的に実証実験を行い、一歩前に進んだ形で普及と技術の習得を図っていきたいと考えています。
（記者）
　今回の実証実験の事業費、予算計上のタイミング、財源を教えてください。
（環境政策課長）
　実証実験について、設置費用や検証のモニタリングなども含め、約 7,000 万円の事業費にです。
　経済産業省の「エネルギー構造高度化・転換理解促進事業費補助金」を活用しています。
（記者）
　今年度当初予算で計上されていますか。
（環境政策課長）
　当初予算で計上しております。
（記者）
　今回の市有施設へのパネル設置は、壁面に貼り付けるイメージですか。
（環境政策課長）
　各施設の壁面に接着剤で取り付けています。
（記者）
　今回の市有施設へのパネル設置は、パネルを曲げずに貼っているのですか。
（環境政策課長）
　その通りです。今回の設置では、軽量という特徴を確認したいと思っています。

【同時リリース】

（市長）
　年末年始の業務内容のお知らせについて、資料にある内容の通りです。
　12 月から市内で火災が 4 件発生しており、非常に心配しております。
　特に高齢世帯に対し、ストーブの取り扱いなど、市の公式 LINE で注意喚起したいと思います。
　また、年末にかけて寒気が周期的に流れ込むことが予想され、大雪となる可能性があります。そこで二つお願いがあります。
　一つ目は、大雪時の外出についてです。
　大雪時は大規模な車両滞留が起きる可能性があるので、天気予報を確認し、不要不急の外出を控えていただくとともに、やむを得ず車で出かける際は、防寒具、スコップ、水、食料

などの備えをお願いします。
　二つ目は、除雪事故についてです。
　除雪作業中の屋根からの落下や、屋根からの落雪での負傷、命を落とすといった事故が、冬の間に必ず起きていますので、除雪作業には気をつけていただきたいと思います。
　除雪作業は一人でしない、特に屋根の雪下ろしは一人ではせず、無理をしないで、十分気をつけて除雪を行っていただきたいと思います。

【その他の質問】

（記者）
　柏崎刈羽原発について、原子力規制庁が事実上の運転禁止命令を解除して、まもなく１年になります。この間、国から県知事に対しての再稼働への理解要請や、7 号機の燃料装荷など、さまざまな動きがありました。現状をどうご覧になられていますか。
（市長）
　今年は再稼働へのスケジュールが、どんどん消化されていると感じました。
　私は一貫して、各市町村が考える課題が解決されない、あるいは明らかになっていないものについて、それらが明らかになり説明されるまでは、再稼働の議論はすべきではないと申し上げてきました。その気持ちは変わっていません。
　花角県知事が被ばくシミュレーションを行うと明言しています。それが行われることで、市町村研究会や、長岡市が指摘してきた、さまざまな課題について、具体的な議論ができるのではないかと考えています。ただ、この再稼働の議論は、まだまだ先になるのではないかと考えています。
（記者）
　一番解決されていない課題はなんでしょうか。
（市長）
　身近に感じる課題は、大雪との複合災害です。大雪と地震、大雪と津波、そういったものが同時に起きる可能性があり、住民の皆さんがリスクを回避し、安全に避難できる避難計画なのか、合理的な説明ができません。
　特に屋内退避について、タイミングや期間が明らかになっていません。
　直接市民に接する私としては、説明が十分にできないまま、この再稼働の議論が進むことはあり得ないと思います。
　屋内退避の問題やリスク、放射性物質の範囲のシミュレーションなど、いろいろと明らかにしていただけるといいなと思っています。
（記者）
　県が現時点で考えているシミュレーションでいいのか、あるいはもう少しいろいろなパ

ターンをやるべきだと思われるのか、考えをお聞かせください。

（市長）

ひとまず県が考えるシミュレーションを行い、公表、説明し、リスクについての議論をしっかりと行えばよいと思います。そうすると、シミュレーションの議論というより、リスクの議論を行うことが前提になります。

このシミュレーションを基に、リスクの説明と、それに対する県民、市民の考え方、そして避難計画の最適化が行われると思います。

シミュレーションを行うことについては、歓迎したいと考えています。

（記者）

柏崎刈羽原発の再稼働の是非を問うため、市民団体が県民投票の実現に向けた署名活動を行っています。

条例制定のための直接請求に必要な署名数を超えたと報道されていますが、県民投票についてや、市民のこうした動きについて、考えをお聞かせください。

（市長）

最終的に県知事が判断する時、県民の意向をどう汲むかについて、それほど選択肢があるわけではなく、花角知事は責任を持って考え方を示し、信を問うと言っております。信を問うは、おそらく選挙だと思いますが、選挙という選択肢は当然あると思います。

県民投票も選択肢の一つだと考えています。

（記者）

県民の皆さんは、いろいろな情報やシミュレーションを含めて判断できる材料を早く示してほしいという思いがあると思いますか。

（市長）

判断する材料がないままイエスかノーかを問うことは、非常に危険だと思います。

いろいろな情報、国、規制庁、県、専門家の考え方を県民の皆さんに説明し、ある程度理解いただいた上でないと、選挙でも県民投票でも、場合によってはミスリードになる可能性があります。私はそういった判断材料は全然整ってないと思います。

ゼロリスクを求めることは間違いだと思いますが、不利益な情報もきっちり出すことが必要だと思います。

被ばくシミュレーションが行われ、いろいろなリスクの程度や、内容などを県民の皆さんに説明、理解していただき、その後県民の判断が下されるべきだと思っています。

（記者）

今年１年間を総括していただき、来年に向けての一言お願いします。

（市長）

今年１年間、私にとっても、長岡市、日本にとっても、激動の１年間だったと思っています。ただ、激動は今年で終わりではなく、激動が始まった年だったと思っています。

市民生活は、物価の高騰により苦しくなっています。

特に現役世代の手取りの問題が、政治問題化しています。子育てをしている方、これから結婚する方、仕送りしている方など、この問題が解決しない限り、日本の活力、経済の活力は伸びていかないと思います。

来年、特に社会保障制度や、税制度など、日本の制度の大きな見直しが期待されると思っております。

今後、世界で起こっている戦争がどうなるのか、そういったところに多額の資金を提供している日本としては、その影響は大きな壁として立ち塞がってきていると思います。

ただ、激動ということは、今まであった古いものや、足かせになっているものがなくなっていく過程でもあると考えられ、新たな希望がスタートする年になっていけばと思っています。

先ほどの太陽光パネルの話のように、長岡市はいち早くそういった希望の光をつかみ、積極的に動いていきたいと思います。

デフレ時代の動かないでいい時代から、インフレ時代の動かないと衰えてしまうような時代に変わりつつあります。長岡市は積極的に動いていき、来年も皆さまに今年以上のいろいろな話題の提供、政策のご説明ができればと考えています。